

高校生作文における複文構造

——外国人・日本人高校生作文と国語教科書の複文の傾向——

立命館大学 大学院言語教育情報研究科 教授 有田 節子

研究成果要約

1. 研究活動の概要

本研究の目的は、①外国ルーツ高校生、日本人高校生の作文、学校教科書掲載の文章を対象に、複文に着目して分析を行い、データを比較することにより外国ルーツ高校生の作文の特徴を明らかにすること、②高校卒業時に獲得していることが望まれる作文力の目標設定の参考とするため、国語教科書に掲載されている文章を文法的視点で分析すること、である。

小学校から高校の国語教科書と外国ルーツの高校生を含む高校生作文の複文を分析した松本（2017）では、高校生作文よりも教科書に、教科書間では小学校教科書より高校教科書に、連用節の割合が低く、連体修飾節の割合が高いという結果を得た。本研究では、松本（2017）にデータを追加し再検証したうえで、複文の計量分析の結果を日本語文法の視点から質的に分析する。質的な分析は、連体修飾節および副詞節について行う。連体修飾節については、国語教科書を対象に調査する。連体修飾節と主名詞の関係、主名詞の難易度などに着目して分析する。副詞節については、日本語学習者の作文においてわかりにくさの原因であると指摘（田代, 2005）されるテ形節について、原因理由節、付帯状況節、時間（継起）節に着目した分析を行う。

2. 研究成果の概要

本研究では外国ルーツ高校生、日本人高校生の作文収集からはじめ、高校生作文の特徴を文法的視点で捉えるために、複文に着目して分析を行った。また、小学校・中学校・高校の国語教科書の文章の複文についても分析し、教科書間の比較や高校生作文との比較を行った。

複文構成において、連体修飾節は高校生作文より学校教科書に高い割合で出現しており、副詞節は学校教科書より高校生作文に高い割合で出現することが確認できた。教科書間の出現割合にはあまり差がないかに見えた連体修飾節には、その文法構造や意味関係において学年に応じた特徴が確認された。

外国ルーツ高校生の作文と学校教科書のテ形節との比較分析では、教科書間には、テ形節の出現割合、用法による節末形式の使い分けに共通の特徴が見られたが、教科書と外国ルーツ高校生作文を比較すると、連用節におけるテ形節の割合、テ形節の3つの用法の出現割合がいずれも異なっていた。外国ルーツ高校生の作文には、テ形での連鎖が多い話し言葉に一致する特徴が見られ、外国ルーツ高校生作文が話し言葉の文体で書かれていることが明らかになった。

以上の成果を日本語教育学会関西支部集会（2017年9月）、関西言語学会（2018年6月）、日本語文法学会（2018年12月）において発表した。また、関西言語学会のプロシーディングズ（査読有）にも論文が採択された。

3. 成果活用について

2019年3月末の時点で、収集した全データの電子化は終了した。節のタグ付与が完了したデータのうち、分析に使用したデータは85編（外国ルーツ高校生33編、日本人30編、国語教科書22編）で、現在もタグ付与作業、分析は進行中である。

高校生作文と教科書作文の複文構成の差異は、それぞれの従属節を詳細に分析することにより、文体差の反映であることが確認できた。外国ルーツ高校生を含む高校生の作文リテラシーの向上には、連体修飾節や節末形式の適切な使用など複文を意識した書き言葉の指導が不可欠である。本研究の教科書・高校生作文における複文構成の実態解明は、文法と文章構成を繋げる作文指導を進めるうえで必要かつ有益な情報を提供することができる。

4. 今後の研究課題

外国ルーツ高校生を含む高校生の作文リテラシーは大きく3つに分けられる。①問題なく作文が書ける、作文リテラシーの高い高校生、②産出はできるが、書き言葉に問題が見られる、中間言語的リテラシーレベルの高校生、③産出そのものが困難である、作文リテラシーの低い高校生、である。この中で、特に中間言語的リテラシーレベルの外国ルーツ高校生、作文リテラシーの低い外国ルーツ高校生に関しては、作文収集は困難を極め、データそのものが少ないという大きな問題がある。その原因は、①これらの高校生は点在しており在籍状況など実態把握が難しい、②学習環境や生活環境において様々な困難を抱えている場合が多く、高校生本人にも担当教員にも作文に取り組む物理的・精神的余裕がない、ということである。一方で、作文リテラシーの向上のための作文指導の手掛かりを求める声も多い（外国にルーツをもつ子どもの教育支援学習会、2017）。多様な高校生の作文データを収集することが今後の大きな課題であると考ええる。

さらに、本研究で行った基礎調査に基づき、データ分析を活かした作文の具体的指導案や教材開発に発展させることにより、日本語教育・国語教育に貢献したい。

研究成果報告

1. はじめに

1.1 研究の背景

文部科学省（2016）の調査によると、平成18年に1500名足らずであった日本語指導が必要な高校生は平成28年度に3300名を超えた。この10年で2倍以上にはなっているが、高校生の総数や日本語指導が必要な児童生徒の総数における割合は決して高くはない。日本語指導が必要な高校生（以下、外国ルーツ¹高校生）は、ダブルマイノリティであると言える。日本語教育においては、外国ルーツ高校生は年少者と日本語学習者の狭間の存在であり、研究対象となることはほとんどない。外国ルーツ高校生の作文については、実態を知るためのデータも公開されているものではなく、指導のための目標を設定したり、指導方法を検討したりするためのデータもないのが現状である。

そこで、外国ルーツ高校生のリテラシーの実態と高校卒業時に求められるリテラシーのレベルを明らかにすることが必要であるという問題意識から、外国人を含む高校生作文と学校の国語教科書に掲載された文章を対象として、外国ルーツ高校生の作文指導のための基礎調査を行うものである。

なぜ高校生作文を対象にするか

外国ルーツ高校生は、滞在年数や来日後の教育・支援環境により日本語能力は大きく異なるが、日本語能力にかかわらず就職や進学の時期は目前に迫っており、卒業までにある程度の書き言葉のリテラシーを身に付けなければならない。しかし、高校では外国ルーツの高校生一人一人の作文を丁寧に指導する時間がないという学校現場の実情がある。

小川・齋藤（2007）の指摘の通り、外国ルーツ高校生は、母語で年齢相応の教育を受けてから来日している場合が多く、母語での言語能力、認知能力を有している点で、低学年で来日した児童とは異なった作文指導が求められる。また、地域の高校に通う外国ルーツの高校生は日本人高校生と学校生活をともにするため、日本語との接触機会が非常に多く、話し言葉の習得は早い。しかし、段階的な日本語教育を受けていないため、文法や書き言葉の指導が不十分である。この点で、成人の日本語学習者とも異なった作文指導が必要である。

なぜ複文を対象にするか

文章をわかりやすくするためにできるだけ短い文で書くという作文指導は、日本語を母語とする大学生のレポート指導においても見られる。しかし、短い文の羅列は稚拙な印象を与えか

1 「外国ルーツ」とは本人や親が日本語以外を母語としている、学習言語や生活言語が日本語ではなかったために日本語能力が不十分である児童生徒のことを表現するために用いている。本人の意志ではなく親に伴って移動（移住）する児童生徒であり、留学生とは区別する。「外国ルーツ」とすることの是非については議論の余地があるが、本稿では「外国につながりのある」「多言語環境にある」「二言語環境にある」などと呼ばれる児童生徒も、国籍や母語の如何にかかわらず「外国ルーツ」と呼ぶことにする。

ねず、文章の質を向上させるには、読み手への意味理解の負担を軽減するための論理的まとまりのある複文を必要に応じて産出する能力も必要とされる。

作文指導については、複文以前に内容・構成についての指導、語彙力を向上させる指導、非母語話者については漢字など文字表記に関する指導など必須の課題が多数ある。日本語学習者の作文においては、文法よりも内容・構成の方が作文の評価に影響を与えるという結果を示した先行研究もある。しかし、作文指導は多角的、多面的、並行的に行われるべきものであり、内容・構成の能力を十分に獲得してから文法の能力を向上させようというものではないことは明白である。作文に必要な様々な課題の各側面に指導の段階があり、それをバランスよく発達させてこそ質の高い作文が書けると考える。作文の内容・構成、語彙、助詞などに関する研究は十分と言えないまでも着手されているが、作文指導の視点から複文分析を行う研究は見られない。複文さえ書ければ作文力は向上するなど主張するものではないが、作文の質の向上には適当な複文の産出が必要であることも否定できないと考える。

なぜ学校の国語教科書掲載の文章を対象にするのか

国語教科書の複文を調査するのは、第一に、段階的な日本語教育を受けていない外国ルーツ高校生にとって教科書が最も身近な書き言葉の手本であり、第二に教科書は当該学年で習得することを期待される内容を選定したものであり、第三に教科書の中で授業における使用頻度が最も高いからである。外国ルーツの児童生徒にとって複文の読解や産出は難しく、適切なリテラシー向上の指導のために教科書の複文構成を分析することの必要性はバトラー後藤（2011）でも指摘されている。学校の教科書において、どの学年でどのような意味を持つ接続表現や接続形式が使用されているかを知ることが、短期間に書き言葉を身に付けなければならない外国ルーツ高校生に対する効率的、合理的な作文教育には欠かせない。段階的、体系的な日本語教育を受けておらず、今後もそれが望めないまま社会に出る日だけは刻々と近づいてくるという、非常に特殊な環境に置かれている外国ルーツ高校生の作文指導に、国語教科書の複文の調査・分析は必要かつ有効である。

また、教科書の複文を学年ごとに分析し、文章の質の向上に複文がどのように機能しているかを知ることが、日本語教育のみならず、昨今「書けない」ことが指摘されている日本人高校生の国語教育・作文教育にも活用できる。

1.2 先行研究

本節では、外国ルーツの年少者の作文を対象にした先行研究について述べる。

中島（2005）は、多言語環境にある児童生徒の言語習得に関する研究論文についてまとめ、作文に関する研究が極めて少ないことに言及している。一定の条件を満たす100編の論文のうち、作文力についての実証的研究は1割に満たないと述べている。中でも、児童生徒の母語と第二言語のどちらかが日本語である作文研究は希少であることを明らかにしている。

生田（2006）は、2言語環境にある中学生の第二言語（日本語）の作文において、「節あたりの文法の誤用数」が、滞在年数が長くなってもなかなか減少せず、日本語を母語とする児童に追い付けないことを示した。産出量、文の複雑さ、構成と内容については、比較的早い時期に日本語を母語とする児童と差がなくなるが、文法の誤用は滞在8年を過ぎても日本語を母語とする児童と差がなくなり、正確に「書く」ことにはかなりの時間を必要とすることを示唆

している。また、「誤用とは言えないが、書きことばとして不適切」(p.75)な例として13の節からなる文が提示されている。これが「不適切」な理由を、生田(2006)は、「話すように書」いているからであるとしている。

バトラー後藤(2011)では、小学校、中学校、高校の教科書について、教科書の複文率が75%になっていること、学齢が上がるほどに、用言数、埋め込み構造数、並列構造数などが増えていく傾向にあることを示し、複文の構造が複雑になればなるほど、論理関係の理解の難度が高くなっていくことを指摘している。バトラー後藤(2011)は、第二言語習得教育、バイリンガル教育の視点からだけでなく、教科教育の視点から日本語を母語とする児童生徒の学力問題などにも触れ、年少者のリテラシーや文法、とりわけ複文構成の問題について、教科書における言語表現のレベルの移行などを考えるためにも、今後文法についての詳しい調査や研究が必要な課題であると指摘している。

鎌田(2007)は、日本語を母語とする児童においても習得が難しいとされている書き言葉が、日本語を母語とせず日本語指導を必要としている児童の文章にどのような特徴を持って現れるのかを明らかにしようとした。鎌田(2007)は、児童40名(日本語指導を受けている児童(J群)、日本語を母語とする児童(F群)、各20名)について、①一テキストおよび一文あたりの文節数、②一テキストあたりの命題数、③一テキストあたりの複文使用数、④連体修飾節数と連体修飾節の主名詞の性質について分析を行った。すべてにおいてJ群とF群に量的な差が認められ、③④については特に5年生以上の児童で顕著な差が見られたことを明らかにしている。

清田(2003)は、海外から帰国した日本語指導を必要とする児童2名を対象とした縦断的研究で、教科と言語の統合学習の試みについて論じた。対象児童の書く力の変化に焦点を当て、児童の社会科のノート分析により、課題の認知レベルと言語技能の発達の間関係を明らかにしている。増加が見られた副詞的従属節の変化を質的に詳しく分析しており、学習開始当初は「『AだからB』『AならB』のような1対1の単純な対応関係が表現されて」(清田2003:9)いたが、3ヶ月目には複数の接続助詞を使用した文が増え始めたことを明らかにしている。

齋藤(2015)は、2014年から2017年にかけて、外国ルーツの年少者についてのリテラシー研究として、東京の外国人児童を含む小学生作文を対象に大規模な横断的、縦断的調査を行い、小学2年生時に見られた外国人児童と日本人児童の一定程度の差は、6年生になっても解消されていないことを報告している。特に外国人児童には、段落を構成する力が十分に発達していないこと、命題間の結合関係が単純であることなどを指摘している。

工藤(2016)は、児童の出来事作文から、複文に見られるねじれ文についての分析を行い、日本人児童と外国人児童を比較すると、日本人児童には学年が上がるほどに「過剰タイプが減り、呼応不整が増えていく」という共通した傾向が見られるが、外国人児童については、学年が上がっても過剰タイプがなくなることはなく、挿入タイプが見られるようになるという特徴があることを報告している。

小川・齋藤(2007)は、第一言語で年齢相応の学校教育を受けてから来日した外国ルーツの中学生や高校生には、既に身に付けている言語能力や認知能力を活かす形での学習支援が必要であると主張している。日本語の複雑で多様な接続形式の中から、学齢に応じて使用頻度の高い接続形式を選定するなど、接続形式のバリエーションをレベルに応じて整理することが求められていることを示唆した研究であると言える。

以上のように、外国ルーツの児童生徒の作文についての研究は行われているが、小・中学生

を対象としたものがほとんどで、高校生になると発達との関連で捉えにくくなるせいか、「書き言葉」や作文を対象とした研究が見られなくなってしまう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、①外国ルーツ高校生、日本人高校生の作文、学校教科書掲載の文章を対象に、複文に着目して分析を行い、データを比較することにより外国ルーツ高校生の作文の特徴を明らかにすること、②高校卒業時に獲得していることが望まれる作文力の目標設定の参考とするため、国語教科書に掲載されている文章を文法的視点で分析すること、である。

3. 研究概要

小学校から高校の国語教科書と外国ルーツの高校生を含む高校生作文の複文を分析した松本(2017)では、高校生作文よりも教科書に、教科書間では小学校教科書より高校教科書に、連用節の割合が低く、連体修飾節の割合が高いという結果を得た。本研究では、松本(2017)にデータを追加し再検証したうえで、複文の計量分析の結果を日本語文法の視点から質的に分析する。質的な分析は、連体修飾節および副詞節について行う。

連体修飾節については、国語教科書を対象に調査する²。連体修飾節と主名詞の関係、主名詞の難易度などに着目して分析する。

副詞節については、日本語学習者の作文においてわかりにくさの原因であると指摘(田代, 2005)されるテ形節について、原因理由節、付帯状況節、時間(継起)節に着目した分析を行う。

3.1 研究方法

3.1.1. 作文調査

調査協力校において年1回(7月)に作文調査を行い、外国ルーツ高校生、留学生を含む高校生の作文を収集する。作文のテーマについては、調査協力校の国語教員と相談し、最も取り組みやすい学校行事についての出来事作文「体育祭について」「文化祭について」とする。

作文はいずれも、学校の授業中に40分を目処に、400字詰め原稿用紙に手書きする。教員による添削・修正は行わないものとする。

3.1.2. 学校の国語教科書掲載の文章の調査

教科書は以下通り、説明文・論説文に分類される22編を対象に調査を行う。小学校、中学校の教科書については、教科書のための書下ろしの文章を選択する。

小学校6年生の国語教科書から「時計の時間、心の時間」、「生き物はつながりの中で」、「柿山伏について」、「イーハトーヴの夢」、「伝えられてきたもの」、「狂言 柿山伏」、「私と本」の7編、中学校3年生の国語教科書から「温かいスープ」、「誰かの代わりに」、「『想いのリレー』に加わろう」、「月の起源を探る」、「古典を心の中に」、「作られた『物語』を超えて」の6編、

2 現時点では、高校生作文には連体修飾節が非常に少なく、分析するのに十分なデータが得られなかったためである。

高校3年生の教科書から「世界との対話」、「水の東西」、「やっぱり」、「情報時代に必要な文章能力」、「考えることのおもしろさ」、「学ぶことの身体性」、「『瞬間』をのぞいてみる」、「ふわふわ」、「死と向き合う」の9編である（出版社、著者など出典の詳細は論文末の資料欄に掲載する）。

3.1.3. データの分析方法

収集した高校生作文274編（外国ルーツ高校生の作文37編、中国からの留学生の作文60編、日本人高校生177編）、国語教科書の文章22編（小学校7編、中学校6編、高校9編）について分析を行う。分析にあたり、複文や節の定義や従属節の意味・機能の分類については、原則として益岡・田窪（1992）に則り、複文は「複数の述語からなる文」、節は「複文を構成するところの、述語を中心とした各まとまり」と定義する（益岡・田窪 1992: 4）。意味分類タグについては、池原（2009）を援用した松本（2018a）の分類（表1）を使用する。

表1 節の意味・機能の分類基準（松本、2018a）

機能的分類			意味的・形式的分類	節末形式
1段階	2段階	3段階	4段階	
補足節	名詞節		コト型+格助詞等	ことを・ことが・ことに…
			ノ型+格助詞等	のを・のが・のと・ので…
			トコロ型+格助詞等	ところを・ところで…
			節+格助詞等	節+に・節+が・節+を…
	疑問節		選択疑問文	か/や/やら/かしら
			疑問語疑問文	疑問語+か
	引用節		直接引用	引用符+と
			間接引用・ト	と
			間接引用・ヨウ	よう（に）
			間接引用・ナドト	など（と）
連体節 ³	補足語修飾節			
	内容節	同格関係		（という）（との）
		非同格関係		
	形式名詞修飾節			
その他		節+の	節+の	
連用節	副詞節	時間節		とき・ころ・際…
		条件		と・ば・たら…
		譲歩		ても…
		原因・理由・手段		ので・ため・から…
		付帯状況		ながら・つつ…

3 本稿では連体修飾節とする。

連用節	副詞節	様態		ように・ふうに…
		逆接		が・けれど…
		程度・比較		くらい・ほど・だけ…
		目的		ために・ようと…
		その他		
	並列節	順接的並列		連用中止・て…
		逆接的並列		が・けれど(も)…

高校生作文、教科書の文章はすべて電子データ化する。テキストデータの処理はサクラエディタを使用し、形態素解析はUniDic、MeCab、CaboChaを使用して行う。形態素解析を行ったデータについて、表1に示したタグを人手で付与する(図1)。タグ付与については、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ⁴。Maekawa et al. 2014)の節分類アノテーションでトレーニングを受けた、本研究の共同研究者が行う。

	A	B	C	D	E	F
140	出場					
141	し					
142	て	RYb100-連用節-並列節-順接的並列-*		RY-連用節		
143	リベンジ					
144	し					
145	たい					
146	と			HS-補足節		
147	思い					
148	ます					
149	。			EOS-文末		
150	また					
151	橋引き					
152	の					
153	方					
154	です					
155	が	RYb100-連用節-並列節-順接的並列-*		RY-連用節		
156	みんな					
157	力					
158	が					
159	とても					
160	強かつ					
161	た					
162	の	RYa200-連用節-副詞節-原因理由手段-*		RY-連用節		
163	で					
164	力					
165	の					
166	ない			RT-連体修飾節		
167	僕					
168	は					
169	あまり					
170	チーム					
171	の					
172	力					
173	に					
174	なれ					
175	て					
176	い					
177	なかつ					
178	た					
179	な					
180	と			HS-補足節		
181	思い					

図1 タグ付けデータ例

4 Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese : 国立国語研究所

タグ付与したデータに基づき、作文（外国ルーツ、留学生、日本人）と学校教科書のそれぞれについて、節の機能・意味ごとに計量分析を行う。

3.2 成果発表

- ①有田節子・長谷川ユリ・古川敦子・松本理美・荒木聖加、シンポジウム「外国にルーツのある高校生の生活と学習」日本語教育学会関西支部集会、立命館大学、2017年9月
- 日本語教育学会関西支部集会において、大阪教育大学の教員、大阪府立高校の教員らとともに、シンポジウムを行い、狭間的存在である外国ルーツ高校生が抱える問題、支援の必要性についての問題提起を行った。
- ②松本理美・有田節子「国語教科書における連体修飾節構造 —外国ルーツ高校生の日本語リテラシー教育のための基礎調査—」関西言語学会、甲南大学、2018年6月
- ③松本理美・有田節子「国語教科書における連体修飾節構造 —外国ルーツ高校生の日本語リテラシー教育のための基礎調査—」『KLS Selected Papers 1』関西言語学会、印刷中
- 学校教科書の文章を分析することにより、教科書の連体修飾節の使用実態を明らかにし、各教科書における連体修飾節や主名詞の特徴や教科書間の相違点を示すことで、外国ルーツ高校生、日本人高校生双方の作文指導に有効なデータを提供した（4.2節で要約して述べる）。
- ④松本理美「外国ルーツ高校生作文に見られるテ形節の特徴 —国語教科書との比較を通して—」、日本語文法学会、立命館大学、2018年12月
- 外国ルーツ高校生の作文と国語教科書の文章を比較分析することにより、それぞれの特徴を明らかにし、作文指導の際に留意すべきポイントを提案した（4.3節で要約して述べる）。

4. 分析結果と考察

2019年3月末の時点で、収集した全データの電子化は終了した。節のタグ付与が完了したデータのうち、分析に使用したデータは85編（外国ルーツ高校生33編、日本人30編、国語教科書22編⁵⁾）で、現在もタグ付与作業、分析は進行中である。

表2 文章データの概要

	文章数	文の数	形態素数	補足節	連体修飾節	副詞節	並列節
小学教科書	7	305	5397	91	252	148	71
中学教科書	6	382	8997	227	477	265	102
高校教科書	9	603	13169	337	761	387	123
外国人作文	33	467	6251	77	45	244	71
日本人作文	30	275	5920	55	23	90	37

※ 便宜上、日本人高校生作文を「日本人作文」、外国ルーツ高校生作文を「外国人作文」と略した。

5 分析に使用した教科書の文章は「説明文・論説文」のジャンルに分類されているもので、小・中の教科書の文章はすべて教科書に掲載するために書き下ろされたものである。

4.1 複文構成について

日本人高校生・外国ルーツ高校生の作文と小学校・中学校・高校の国語教科書（以下、適宜略して表記する）に掲載された文章の複文の従属節を量的に比較する。

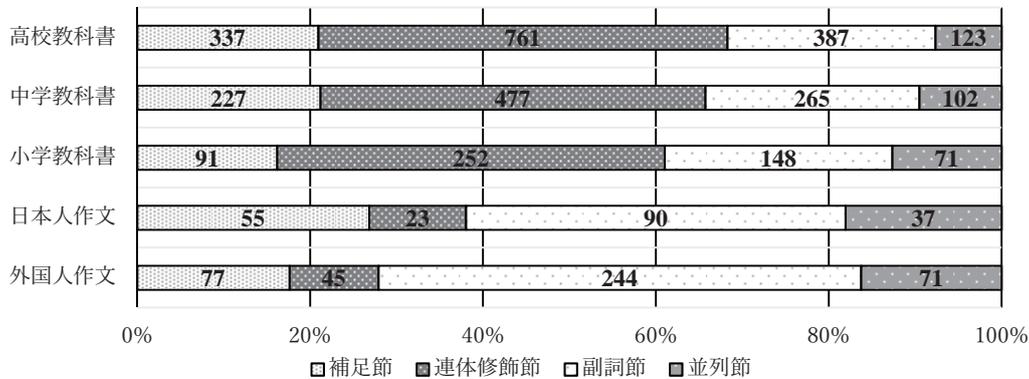


図2 国語教科書等・高校生作文の複文構成

※ 図2以下、グラフ内の数字は頻度を表す。

図2に示した通り、教科書では連体修飾節の割合が最も多く、連体修飾節、副詞節の従属節に占める割合は教科書間に差がなかった。教科書と日本人高校生・外国ルーツ高校生の作文を比較すると高校生⁶の作文で連体修飾節の割合が低く、副詞節の割合が高いことがわかる。

4.2 国語教科書の連体修飾節について

本節⁷では、高校生の作文と学校の国語教科書で、出現割合に顕著な差が見られた連体修飾節と副詞節のうち、高校生作文では1割程度の出現率であった連体修飾節に着目する。連体修飾節が高校生作文で出現し難い理由を解明するため、小学校・中学校・高校の教科書間の比較分析を行い、それぞれの特徴を明らかにする。

4.2.1. 連体修飾節の分類と出現割合

連体修飾節については、大島（2010）に則り、連体修飾節を補足語修飾節、命題補充節、相対名詞節に分類⁸して分析を行う。それぞれのタイプについて大島（2010）に倣い簡単に説明する。補足語修飾節は、(1)のように修飾節内部に主名詞を復元できるものである。命題補充節は、(2)のように主名詞と修飾節が同格で、主名詞の「事態」を修飾節でも同時に表現しているものである。相対名詞節は、(3)のように主名詞が修飾節の内容に相対的に関係する「時」、「位置」、「ことがら」を表すものである。

(1) こんな言葉を覚えている教え子（小6・「イーハトーヴの夢」）

(2) 誰かに依存している状態（中3・「誰かの代わりに」）

6 「高校生」とした場合、外国ルーツ高校生、日本人高校生を合わせたすべての高校生を指す。

7 3.2節で述べた成果発表のうち、松本・有田（印刷中）を要約したものである。松本・有田（印刷中）は漢字・日本語教育研究助成により成し得た研究であるため、成果として要約して報告する。

8 詳しくは、松本・有田（印刷中）を参照されたい。

(3) 佐藤さんが来る前

国語教科書の文章において、学校種別のそれぞれのタイプの修飾節の出現割合⁹は図3の通りである。

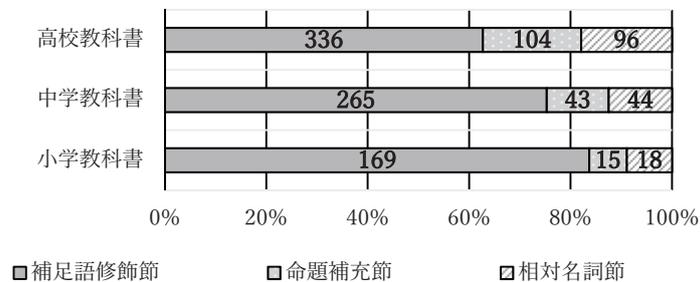


図3 連体修飾節のタイプ別出現割合

補足語修飾節は学年が低いほど出現割合が高く、命題補充節、相対名詞節は学年が高いほど出現割合が高いことが明らかになった。修飾節と主名詞が意味的な関係にある命題補充節、相対名詞節は、修飾節と主名詞が統語的な関係にある補足語修飾節よりも高度なリテラシーが要求される連体修飾節であることを示唆している。以下、3つのタイプの連体修飾節のうち、補足語修飾節と命題補充節について詳細に分析する¹⁰。

4.2.2. 補足語修飾節の分析

補足語修飾節については、節内の述語の種類、文法構造に着目した分析を行う。国語教科書の補足語修飾節における動詞述語、名詞述語、形容詞述語の頻度と出現する割合は図4の通りである。学年が低いほど、行為を具体的に表現する動詞述語の割合が高く、様態を抽象的に表現する形容詞述語の割合が低い傾向が確認された。

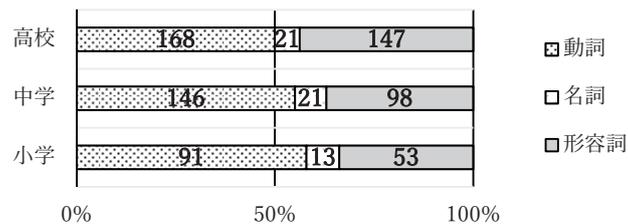


図4 補足語修飾節の述語の種類

補足語修飾節内に用いられるヴォイス表現¹¹については、受動文に着目して文法構造の変化を捉えた角田（2004）に倣い、分析を行った。結果は図5の通りである。

9 図3に示した3つのタイプの連体修飾節には形式名詞を主名詞とする修飾節は含まれていない。
 10 相対名詞節については、補足語修飾節や命題補充節に比べ、分類基準が明確ではない。相対名詞節という分類については議論の余地があると考えため、今後の課題とする。
 11 益岡・田窪（1992）に則り、「接辞の付加に伴って補足語の格が規則的に変更する現象にかかわる文法形式」である受動表現、使役表現、可能表現をまとめてヴォイス表現と呼ぶ。

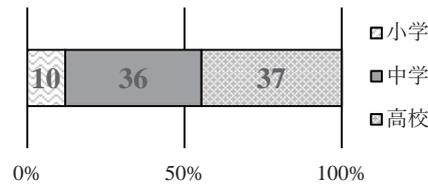


図5 ヴォイス表現の割合

ヴォイス表現の出現割合は、小学校教科書で非常に低く、中学校教科書で急増し、高校教科書では中学校教科書と変わらなかった。この原因については、後述する主名詞の統語機能の特徴と併せて考察するが、修飾節の述語の種類やヴォイス表現の使用率の相違は、学年相応の文法構造が反映されていることを示唆するものである。

次に、補足語修飾節の文法構造について、主名詞がどのような統語機能で修飾節の内部に復元されるかという観点で、主名詞を主語（能動主語・受動主語）・直接目的語・間接目的語・斜格目的語・所有者名詞句に分類して分析を行った。結果は図6の通りである。

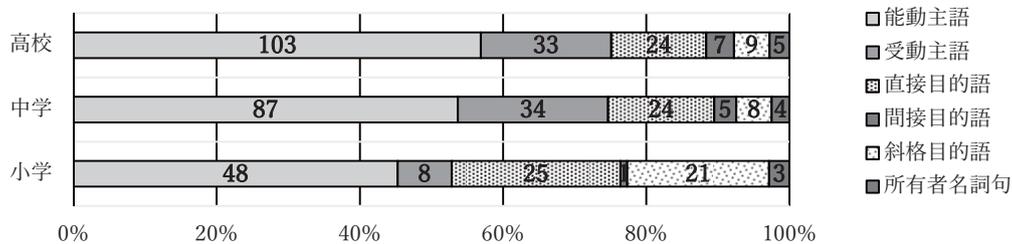


図6 主名詞の統語機能

補足語修飾節の文法構造を主名詞に着目して分析すると、小学校教科書では、主名詞が修飾節の受動主語となる割合は、中・高の教科書に比べ顕著に低い（図6）。小学校教科書で主名詞が修飾節の述語の直接目的語となる割合が高いのは、能動文のまま主名詞を修飾するケースが多いからであると言える。

4.2.3. 命題補充節の分析

命題補充節については、修飾節と主名詞の意味関係について大島（2010）の分類を用いた分析、主名詞の難易度に着目した分析を行う。

前述した通り、修飾節と主名詞が意味的な関係にある命題補充節、相対名詞節は、学年が低いほど出現割合が低かった（図3）。中でも教科書間に有意な差が見られた命題補充節について、大島（2010）¹²を援用し、修飾節内の主語出現の可否、修飾節と主名詞の意味関係による分類を行った。結果は表3の通りである。

¹² 大島（2010）は、主名詞について、修飾節内に主語が出現できるか否かという統語的、形態的特徴による分類を経て、意味的特徴により「ラベルづけタイプ」、「関数タイプ」、「側面抽出タイプ」の3つのタイプに分類した。詳細については、松本・有田（印刷中）を参照されたい。

表3 国語教科書の命題補充節の主名詞の分類

(主語不可の連体修飾節)				(主語可の連体修飾節)				
	小学	中学	高校		小学	中学	高校	
動き・行為	0	0	4	ラベル	事実	1	2	9
準可能形式	1	2	3		ことがら	6	5	6
志向	1	0	0		表出	0	9	7
小計	2	2	7		小計	7	16	22
(どう) 心理	1	3	7	関数	「さま」	1	9	30
前兆名詞	0	0			思考	1	4	19
小計	1	3	7		小計	2	13	49
(もの) 心理	0	0	0	側面	確率	1	1	6
					心理	0	0	6
					伝達	0	0	0
					作品	2	3	3
					感情	0	3	1
					構造	0	2	3
小計	0	0	0	小計	3	9	19	
計	3	5	14	計	12	38	90	

学年上昇に伴い、修飾節と主名詞の意味関係の抽象度が高く複雑になる「関数タイプ」や「側面抽出タイプ」の主名詞の頻度が増加する。学年が上昇すると学習語彙が増加し、主名詞の種類増加に伴い修飾節の出現頻度も高くなる。命題補充節の出現頻度が学年上昇とともに高くなるのは、主名詞となる語の難易度と関連があると考えられる。

小・中・高の教科書の命題補充節の主名詞となっているすべての語（異なり）を、旧日本語能力検定試験の出題基準を示した学習語彙表（国際交流基金・日本国際教育支援協会、2007）に従って、1級（上級）～4級（初級）に分類し集計した。結果は図7に示した通りである。

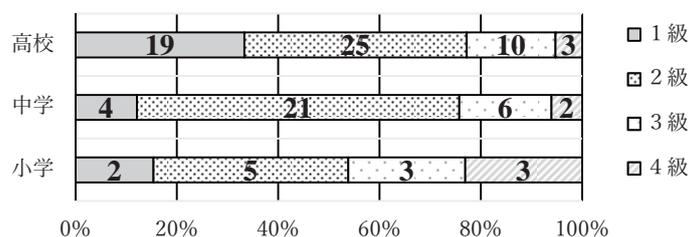


図7の通り、中・高の教科書においては2級以上の難易度の高い語が大半を占めている。特徴的であるのは、①高校教科書では1級の語が多いこと、②関数タイプの主名詞となっている語の80%以上が2級以上の学習語彙であること、である。これは、小学校教科書の命題補充節の出現割合の低さが主名詞である語の難しさに関連していることを示唆している。

次に、外国ルーツ高校生作文の複文の副詞節と連体修飾節の使用について考察する（原文ま

ま、下線、ボールドは筆者による)。

- (4) 友達は七変化リレーに出ていますから、友達ばかりを見ていた。
- (5) 本番の時にクラスのダンスを踊るのですけどクラスのダンスを覚えてなかったから、最初だけ踊りました。

内藤・小森 (2016) は日本語学習者の作文における「重複による冗長性の回避」について論じているが、外国ルーツ高校生作文にも (4) (5) のように、重複の回避が望ましい例が見られた。(4) (5) の例は連体修飾節で表現することにより重複の回避が可能である。寺村 (1984: 194) は日本語教育の視点から連体修飾節の難しさについて、「連体修飾をする動詞や形容詞におけるテンス、アスペクトの現れかたは、最も複雑で、きまりも微妙である」と指摘している。連体修飾節は連用節に比べ難易度が高いため、日本語リテラシーが低いほど連体修飾節を避け、連用節の連鎖で表現するストラテジーを用いる傾向にあると言える。これが、高校生作文では連体修飾節の割合が低く、連用節の割合が高くなっている原因であると考えられる。

4.3 副詞節のテ形接続について

本節¹³では、出現割合において外国ルーツ高校生作文と教科書に顕著な差が見られた副詞節のテ形接続に着目して分析を行う。

日本語の副詞節の接続形式は多様であり、異義同形の接続表現も少なくない。その代表的なものがテ形による接続であり、日本語学習者の作文ではこのテ形接続の多用が文章の分かりにくさの原因であると指摘されることも多い (田代, 2005)。松本 (2017) は、外国ルーツ高校生の作文において原因理由、付帯状況、時間 (継起) がほぼ同じ割合でテ形節により表現されていることを示し、テ形節の多様で読み手の読解の負担が大きくなることを指摘した。

このテ形の3つの用法に着目し、教科書での使用実態と比較分析することで、外国ルーツ高校生の作文の特徴を明らかにする。

まず、接続形式がテ形か否かに分けて計量分析した。結果は図8に示した通りである。

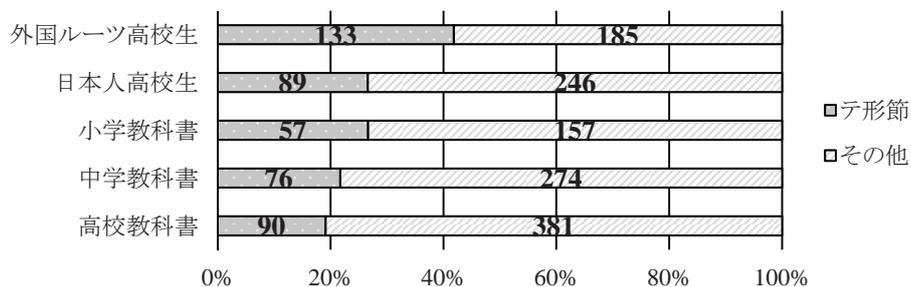


図8 副詞節中のテ形節の割合

外国ルーツ高校生作文にテ形節が顕著に高い割合で出現する。次にテ形節の中で、外国ルーツ

¹³ 3.2節で述べた成果発表のうち、松本 (2018b) を要約したものである。松本 (2018b) は漢字・日本語教育研究助成により成し得た研究であるため、成果として要約して報告する。

ッ高校生作文においてほぼ同じ割合で出現した時間節、原因理由節、付帯状況節のテ形節に着目して分析を行う。

4.3.1. テ形節の使用実態

外国ルーツ高校生作文と教科書におけるテ形節の3つの用法の出現割合（図9）、それぞれの用法におけるテ形の出現割合（図10、項目を適宜略す）を示す。

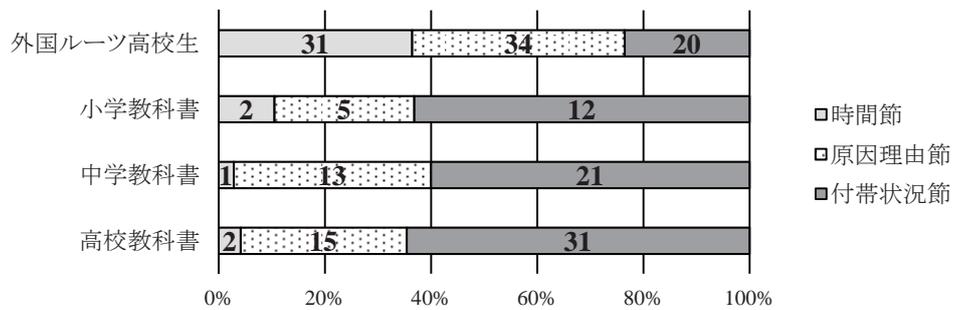


図9 テ形の3つの用法の出現割合

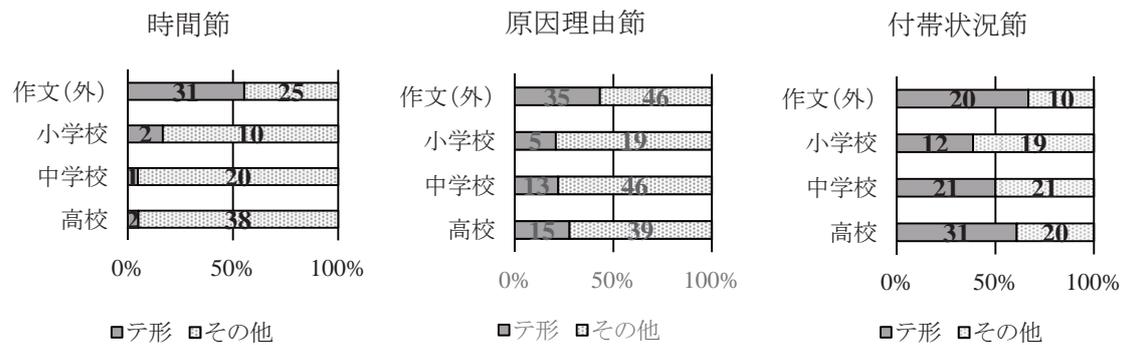


図10 用法別のテ形の割合

外国ルーツ高校生作文では、教科書に比べ副詞節中のテ形節の割合が高いことに加え、テ形節の3つの用法における時間節の割合も、時間節中のテ形節の割合も顕著に高いという特徴がある（図8、9、10）。

外国ルーツ高校生作文と教科書からテ形の時間節の例を挙げる（以下、实例は原文まま、实例の下線は筆者）。

(6) クラスでせんせいのはなしきいてふくきがえました。(外国ルーツ高校生作文)

(7) さいごのさいごはしゃしんをとってとったパネルを解体してせんぱいうですもしてかいいさんしたです。(外国ルーツ高校生作文)

外国ルーツ高校生作文では（6）のようなテ形の時間節の出現割合が非常に高く、（7）のように1文に繰り返し使用される例も少なくなかった。テ形の時間節は小・中・高いずれの教科書にもほとんど出現せず、時間節の節末は前節と後節の時間関係を明示する多様な形式が用いられていることが確認できた。

次に、テ形の原因理由節の例を挙げる。

(8) 椅子をいっぱい持ってしんどかったです。(外国ルーツ高校生作文)

(9) 瓶詰めの底が抜けて、流れ出したような感じがした。(高校教科書)

図9のテ形の3つの用法に占める原因理由節の出現割合を見ると、(8) (9) のようなテ形の原因理由節の割合は大差ないように見える。しかし図10を見ると、原因理由節内のテ形節の割合は外国ルーツ高校生が最も高い。

次にテ形の付帯状況節の例を挙げる。

(10) 本人は、笑って痛くないといました。(外国ルーツ高校生作文)

(11) 一さじーさじかむようにして味わった。(中学校教科書)

図10を見ると、(10) (11) のような付帯状況節中のテ形節は、外国ルーツ高校生作文に最も高い割合で出現してはいるが、小・中・高教科書のいずれにおいても高い割合で出現している。これは、付帯状況を表す接続節の節末形式が限られているためであると考えられる。

次に、外国ルーツ高校生作文から、異なった用法のテ形節が混在している例を挙げる。

(12) そして間中の人はぬけて、はしこを持って低くして、クラス全員をシャンプして、越て、そしてまだ上て、竹をみんなの頭の上に持って行く。(外国ルーツ高校生作文)

(12) は、時間節、付帯状況節、並列節、手段節がすべてテ形で連鎖している。作文においては、このような文が「わかりにくい」文と評価されると考えられる。

外国ルーツ高校生は、日本語指導を受ける機会を持たず、学校などの生活の場で、話し言葉から日本語を学んでいる場合が多い。丸山(2014)は、節連鎖は書き言葉より話し言葉の方に多く現れ、話し言葉にはテ形節やケド節の連鎖が多いと述べている。口語的な文体で、テ形節を多用している外国ルーツ高校生作文の特徴は、丸山(2014)が指摘する話し言葉の特徴に合致している。

4.4 考察

本研究の調査で明らかになった学校教科書と外国ルーツ高校生作文の複文構成の相違、副詞節におけるテ形接続の出現割合の相違については、学校教科書が書き言葉で書かれているのに対し、外国ルーツ高校生作文は話し言葉で書かれているという、文体によるものであることが大きいと言える。流暢な日本語を話す「日本語指導が必要」な外国ルーツ高校生は、話し言葉のまま作文を書いているということになる。

カミンズ(2011)は、言語能力について考える際、会話の流暢度、弁別的言語能力、教科学習言語能力の3つの言語面に分ける必要があると述べている。そして、文法などの弁別的言語能力は会話の流暢さから転移しないことが観察されており、会話の流暢度と弁別的言語能力は比例しないと指摘している。流暢な日本語を話す外国ルーツ高校生が作文力を身に付けるためには、まず書き言葉の指導が必須であるということである。

また、丸山(2014)は話し言葉においてテ形などによる多重連鎖が生じるのは、書き言葉が

時間をかけ、構成を考えて産出されるのに対し、話し言葉はリアルタイムに即興的に産出されるためであると指摘している。外国ルーツ高校生の作文が話し言葉的な文体で書かれているということは、十分に構成が考えられていないことを示唆するものである。

本研究の結果とカミンズ (2011)、丸山 (2014)、寺村 (1984) らの指摘を合わせて考えると、話し言葉と書き言葉は異なるもので、流暢に日本語を話していても、「構成を考えて、書き言葉で書く」という指導を受けなければ、作文リテラシーは向上しないということである。当然のことながら、これは流暢な日本語を話す日本人高校生にも該当する。

さらに、脳科学の知見から本研究の結果を考察すると、外国ルーツ高校生の「書く」「話す」という表現リテラシーの習得順序は、「書く」→「話す」の順で習得される第二言語 (篠塚, 2008) より、「話す」→「書く」の順で獲得される母語 (大石, 2006) に近いと言える。日本語を流暢に話す「日本語指導が必要」な外国ルーツ高校生が日本人高校生と同じ順序で日本語を習得しているとすれば、外国ルーツ高校生のための作文指導は、「作文が書けない」日本人高校生の作文指導にも有効であることを示唆するものである。

5. 結論と展望

5.1 結論

本研究では、外国ルーツ高校生を含む高校生の作文リテラシー向上のための基礎調査を行った。母語での言語能力、認知能力を有し、日本語で流暢に会話をする外国ルーツ高校生が、限られた時間の中で書き言葉を身に付けるためには、小中学生とは異なった作文指導が必要であることを示した。

本研究では外国ルーツ高校生、日本人高校生の作文収集からはじめ、高校生作文の特徴を文法的視点で捉えるために、複文に着目して分析を行った。また、小学校・中学校・高校の国語教科書の文章の複文についても分析し、教科書間の比較や高校生作文との比較を行った。

複文構成において、連体修飾節は高校生作文より学校教科書に高い割合で出現しており、副詞節は学校教科書より高校生作文に高い割合で出現することが確認できた。教科書間の出現割合にはあまり差がないかに見えた連体修飾節には、その文法構造や意味関係において学年に応じた特徴が確認された。

外国ルーツ高校生の作文と学校教科書のテ形節との比較分析では、教科書間には、テ形節の出現割合、用法による節末形式の使い分けに共通の特徴が見られたが、教科書と外国ルーツ高校生作文を比較すると、連用節におけるテ形節の割合、テ形節の3つの用法の出現割合がいずれも異なっていた。外国ルーツ高校生の作文には、テ形での連鎖が多い話し言葉に一致する特徴が見られ、外国ルーツ高校生作文が話し言葉の文体で書かれていることが明らかになった。

高校生作文と教科書作文の複文構成の差異は、それぞれの従属節を詳細に分析することにより、文体差の反映であることが確認できた。外国ルーツ高校生を含む高校生の作文リテラシーの向上には、連体修飾節や節末形式の適切な使用など複文を意識した書き言葉の指導が不可欠である。本研究の教科書・高校生作文における複文構成の実態解明は、文法と文章構成を繋げる作文指導を進めるうえで必要かつ有益な情報を提供することができた。

5.2 展望

本研究の積み残しの課題としては、進行中の電子化したデータの分析を早急に完了させることである。収集した作文データのすべてを研究結果に反映させなければならない。

次に、データ収集についての課題である。外国ルーツ高校生を含む高校生の作文リテラシーは大きく3つに分けられる。①問題なく作文が書ける、作文リテラシーの高い高校生、②産出はできるが、書き言葉に問題が見られる、中間言語的リテラシーレベルの高校生、③産出そのものが困難である、作文リテラシーの低い高校生、である。この中で、特に中間言語的リテラシーレベルの外国ルーツ高校生、作文リテラシーの低い外国ルーツ高校生に関しては、作文収集は困難を極め、データそのものが少ないという大きな問題がある。その原因は、①これらの高校生は点在しており在籍状況など実態把握が難しい、②学習環境や生活環境において様々な困難を抱えている場合が多く、高校生本人にも担当教員にも作文に取り組む物理的・精神的余裕がない、ということである。一方で、作文リテラシーの向上のための作文指導の手掛かりを求める声も多い（外国にルーツをもつ子どもの教育支援学習会、2017）。本研究とアプローチは異なるが、中島（2013）も、カナダのトロント補習授業校児童生徒を対象に行った日英作文力についての研究結果の報告で、研究対象として高校生作文が必要であることを述べている。多様な高校生の作文データを収集することが今後の大きな課題であると考えられる。

また、本調査は主に中間言語的リテラシーの高校生に限って行ったが、作文リテラシーの高い高校生の作文は教科書の複文構成に近づくのか、作文リテラシーの低い高校生をどのようにひきあげるのか、などについても調査、検討していく必要がある。そして、小学生・中学生の作文についても複文に着目した分析を行い、小学生・中学生・高校生の作文の比較や教科書との比較を行いたい。

さらに、本研究で行った基礎調査に基づき、データ分析を活かした作文の具体的指導案や教材開発に発展させることにより、日本語教育・国語教育に貢献したい。

謝辞

本研究は、「平成29年度 漢字・日本語教育研究助成制度」による助成を受けることにより、研究を進めることができた。本研究に助成いただいた公益財団法人 日本漢字能力検定協会の関係者各位に改めて感謝申し上げます。また、本研究の作文調査にご協力いただいた高校（個人情報保護の観点から学校名・個人名を挙げることは控える）の生徒の皆さん、および教職員各位に記して感謝申し上げます。

引用文献

- 外国にルーツをもつ子どもの教育支援学習会（2017）NPO おおさかこども多文化センター、2017年7月9日、国労大阪会館。
- 有田節子・長谷川ユリ・古川敦子・松本理美・荒木聖加（2017）シンポジウム「外国にルーツのある高校生の生活と学習」日本語教育学会関西支部集会、立命館大学。
- バトラ後藤裕子（2011）『学習言語とは何か—教科学習に必要な言語能力—』三省堂。
- カミングズ・ジム（2011）中島和子（訳著）「マイノリティ言語児童・生徒の学力を支える言語

- 心理学的、社会学的基盤」『言語マイノリティを支える教育』 pp.85-115.
- 池原悟 (2009) 『非線形言語モデルによる自然言語処理』 岩波書店.
- 生田裕子 (2006) 「ブラジル人中学生の『書く力』の発達—第1言語と第2言語による作文の観察から—」『日本語教育』 128, pp.70-98.
- 鎌田美千子 (2007) 「年少日本語学習者によるストーリーテリング作文の特徴」『外国文学』 56, pp.45-62.
- 清田淳子 (2003) 「社会科と日本語教育を統合した内容重視のアプローチの試み：日本語指導を必要とする海外帰国生徒を対象に」『言語文化と日本語教育』 26, pp.1-13.
- 工藤聖子 (2016) 「日本生育外国人児童の『出来事作文』にみられるねじれ文の分析」多様な言語文化背景を持つ子どもたちのリテラシーフォーラム3「子どもたちの日本語の発達を可視化する—語彙・文法の力に焦点を当てて—」口頭発表.
- Maekawa Kikuo, Yamazaki Makoto, Ogiso Toshinobu, Maruyama Takehiko, Ogura Hideki, Kashino Wakako, Koiso Hanae, Yamaguchi Masaya, Tanaka Makiro, and Den Yasuharu (2014) *Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese Language Resources and Evaluation (LRE48)* pp.345-371.
- 丸山岳彦 (2014) 「現代日本語の多重的な節連鎖構造について—CSJとBCCWJを用いた分析—」石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』 pp.93-114, ひつじ書房.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 くろしお出版.
- 松本理美 (2017) 『外国ルーツ高校生の作文における複文の特徴—副詞節の節形式の量と質の分析—』立命館大学修士論文.
- 松本理美 (2018a) 「日本語従属節の意味分類基準策定について—『鳥バンク』節間意味分類体系再構築の提案—」『国立国語研究所論集』 第15号, pp.107-133, 国立国語研究所.
- 松本理美・有田節子 (2018) 「国語教科書における連体修飾節構造—外国ルーツ高校生の日本語リテラシー教育のための基礎調査—」関西言語学会第43回大会, 口頭発表.
- 松本理美・有田節子 (印刷中) 「国語教科書における連体修飾節構造—外国ルーツ高校生の日本語リテラシー教育のための基礎調査—」『Selected Papers 1』 関西言語学会.
- 松本理美 (2018b) 「外国ルーツ高校生作文に見られるテ形節の特徴—国語教科書との比較を通して—」『日本語文法学会第19回大会発表予稿集』 日本語文法学会, pp.41-48.
- 文部科学省 (2016) 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成28年度)」の結果について (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1386753.htm [2019年4月12日アクセス])
- 内藤真理子・小森万里 (2016) 「アカデミック・ライティングにおける重複がもたらす冗長性を回避するための方策—卓立性・結束性・論理性・一貫性の観点からの分析—」『日本語教育』 164, pp.1-16.
- 中島和子 (2005) 「バイリンガル育成と2言語相互依存性」『第二言語としての日本語の習得研究』 8, pp.135-166.
- 中島和子 (2013) 「トロント補習授業校児童生徒の日英作文力の実態」(torontohoshuko.ca/images/shiryo/KazukoNakajima/nitieisakubun-saisyuhoukoku_3.pdf) [2016年11月]
- 小川珠子・齋藤恵 (2007) 「『文章の型』を利用した作文プログラムの施行—中学生クラスにおける実践から—」『中国帰国者定着促進センター紀要』 11, pp.45-62.

- 大石晴美（2006）『脳科学からの第二言語習得論』昭和堂。
- 大島資生（2010）『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房。
- 齋藤ひろみ（2015）「日本生育外国人児童の文章構成力の発達に関する研究—出来事作文の分析を通して—」多様な言語文化背景を持つ子どもたちのリテラシーフォーラム2「子どもたちのリテラシーを多面的に捉える」口頭発表。
- 篠塚勝正（2008）「言語脳科学に基づく第2言語習得の考察」『成城英文学』第32号，pp.1-18.
- 田代ひとみ（2005）「日本語学習者のストーリー説明文の問題点：わかりにくさという観点から」『言語文化と日本語教育』30，pp.1-10.
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
- 角田太作（2004）「日本語の連体修飾節：フィリピンを通過してマダガスカルに達する？」影山太郎・岸本秀樹（編）『日本語の分析と言語類型』pp.559-571，くろしお出版。

参考資料

- 小学校教科書：（2015）『国語6 創造』光村図書出版株式会社／一川誠「時計の時間、心の時間」、中村桂子「生き物はつながりの中で」、山本東次郎「柿山伏について」、畑山博「イーハトーヴの夢」、「伝えられてきたもの」、「狂言 柿山伏」、「私と本」
- 中学校教科書：（2016）『国語3』光村図書出版株式会社／今道友信「温かいスープ」、鷺田清一「誰かの代わりに」、藤代裕之「『想いのリレー』に加わろう」、小久保英一郎「月の起源を探る」、竹内正彦「古典を心の中に」、山極寿一「作られた『物語』を超えて」
- 高校教科書：（2005）『国語表現Ⅰ』教育出版；内海隆一郎「世界との対話」／（2006）『国語総合』教育出版；山崎正和「水の東西」、森本哲郎「やっぱり」、樺島忠夫「情報時代に必要な文章能力」／（2008）『現代文 改訂版』教育出版；西研「考えることのおもしろさ」、港千尋「学ぶことの身体性」、小池昌代「『瞬く間』をのぞいてみる」／（2014）『精選現代文B』筑摩書房；鷺田清一「ふわふわ」、清水哲郎「死と向き合う」
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会（2007）『日本語能力試験 出題基準』凡人社